

「女性に対する暴力」

- 実際の取り組み -

藤見 幸雄
藤見心理面接室

財団法人 女性のためのアジア平和国民基金

無断転載を禁じます。
(財)女性のためのアジア平和国民基金
1999年3月発行

この報告書は、アジア女性基金が藤見幸雄氏に調査研究を委託した「女性に対する暴力 -実際の取り組み-」の報告書です。

目次

はじめに	1
1. ワールドワークの考え方	
1) 世界に偏在する諸問題の葛藤解決法	1
2) 全体性	2
3) イマージナルな「場」	2
4) ロール	4
2. ワールドワークの方法と展開	
1) 場に漂う雰囲気を感じる	5
2) ソーテイング	5
3) コンセンサス	6
4) ホットスポット	7
5) ゴーストロール	7
6) 加害者の役割をやり抜く	9
7) ランク	10
- 上位のランクにある者の特権	10
- 社会的ランク(身体的ランクを含む)	12
- 心理的ランク	12
- 霊的ランク	13
- ランク間の問題	13
3. ワールドワークの実際	15
終わりに	40
引用参考文献	45

はじめに

本論文では、「女性に対する暴力」に関する実際の取り組みについて論ずる。それに当たっては、「ワールド・ワーク」(world work) という、新しいグループ・ワークを準拠枠とする。まず、理論的説明を行ない、次に筆者が関わった実際例の一部を現象学的に記述したものを題材に、さらに議論を深め、本テーマに実際に関与する上での可能性について考えたい。

1. ワールドワークの考え方

1) 世界に偏在する諸問題の葛藤解決法

本稿で紹介する「ワールドワーク」とは、アメリカ人の心理学者アーノルド・ミンデルにより創始されたプロセス指向心理学 (process oriented psychology) から生まれた、葛藤解決のための方法である。

その名が示すとおり、「世界 (world)」を扱う「作業 (work)」を意味しており、いわゆる個人の心理的な問題解決に止まらず、世界中に偏在する諸問題—人種差別、民族差別、性差別、環境破壊、核兵器、文化帝国主義と呼ばれる文化の問題、あるいは日本でいえばいじめの問題など—すなわち一個人を超えた社会・世界規模の問題へアプローチする新しい手法として、注目を集めている。

それは従来の社会学ないし政治学的なアプローチとは異なり、プロセス指向心理学に特有の見方や考え方に基づいており、前掲のような諸問題をきわめて体験的に取り扱っていくため、これまでの葛藤解決法や会議、ミーティングといったものに比べると、単なる理性的な対話のみならず、怒りや悲しみ、呻きや苦しみなどの情動 (感情や気持ち)、さらに場合によっては殺意や攻撃性へも真っ正面から取り組んでいる。

それでは以下に、幾つかの顕著な特徴を手かかりとして、ワールドワークを解説していこう。

2) 全体性

ワールドワークの基本には「全体性」という観点がある。

比喩を用いるなら、まずあらゆる現象には、光と影（一般的な価値観からみた「肯定的な側面」と「否定的な側面」と考えられているもの、あるいは「顕在化している側面」と「潜在化している側面」）がある。従来用いられてきた葛藤解決のアプローチは、いわば光の側面にのみ焦点を当て、あたかも「完全性」を追求するかのような態度に基づいていた。これにたいして、「光と影の両面を含んでこそ、全体というものは存在し機能している」と理解するのが、プロセス指向心理学に通底する態度である。

ワールドワークでは、その展開において必ず「中心-周辺」「主流-非主流」「保守-急進」といった二者対立が見いだされることになるが、そのとき両者の立場をともに等しくサポートすることが、全体性を重んじていく態度であると筆者らは考えている。これは一般に、学校、企業、地域社会など、どのような場であれ、私たちが無自覚でいるかぎりには、無批判に主流派の声ばかりが尊重されてしまう現実があることを示唆している。そこにあつては、異質な声やマイノリティの声が抑圧され続け、切り離され、隠蔽されてしまっている事実がある。ワールドワークでは、こうした影の立場の声へ、積極的かつ丁寧に耳を傾け、サポートしていく。ただし、それは単に、非主流派や異端の立場だけを偏愛的にサポートしようとする、旧来のソーシャル・アクション（social action：社会行動）とは明らかに異なる。すなわち、光と影の両者をともに等しくサポートしつつ、しっかりとした対話を、また必要に応じて対決を促し、そこから生じる葛藤や情動に目を背けることなく、両者の声を大切に尊重しながら、さらにはその過程から新たな「第三の見方」が生まれ出られるよう進めていくワークである。

3) イマジナルな「場」

ワールドワークにおいては、当然ながら参加者同士の対決、人と人とのしっかりした向かい合い、エンカウンター（encounter：出会い）といったものが尊重される。しかし、単にそれのみならず「場」という観点を、きわめて重要視している。おそらくこれが従来の社会学・政治学的アプローチと大きく異なる特徴であろう。

ここでいう「場」とは、物理的な場（場所）だけでなく、メタファー（隠喩）としてのイメージ的な「場」をも意味している。それは、ひじょうに濃密な実在感のともなうイマ

イマジナル (Imaginal : 想像的) な「場」である。イマジナルとは、イスラム神秘主義者であり、ソルボンヌ大学で20年にわたりイスラム哲学の教授を務めたアンリ・コルバンが提唱し、今日では政治学者、心理学者、宗教学者、文化人類学者などに広く用いられている特殊な形容詞である。いわゆるイメージには違いないものの、私たちが日常的に暮らしている実生活の体験よりも、はるかに濃密な現実感をともない、肉迫するようなイメージ世界を意味しており、これは自我による「架空のイメージ」というほどの否定的な意味傾向が強いイメージリー (Imagery : 想像上の) とは区別される。

このイマジナルという観点はひじょうに重要なので、寄り道になるが、あえて解説しておきたい。イマジナルな世界とは、日常、私たちが生きている空間とは異なり、きわめて微細で霊妙な次元の場であると想定され、いわば (夜みる) 夢のような場であると言える。夢は一見すれば、取るに足らぬ単なる想像上の産物と思われがちだが、思い返せば、誰しも覚醒時よりよほど実在感のある夢をみた経験があるのではないだろうか。たとえば、ものすごくなされたり、深い悲しみを感じたり、それまで体験したことのないような喜びや充実感を味わったり。これらは現実の体験でこそないが、現実を凌駕する深く微細な情動を喚起し、ときに人生を変容させるほどの影響力をもつ。こうした意義から、夢が臨床心理学あるいは文化人類学的な研究・実践において重視され取り扱われていることは、ここで筆者があらためて注釈するまでもないであろう。

ワールドワークとは、ちょうどこうしたリアルな夢のような「場」であると想定されている。夢のなかで現れてくるような世界が、グループで話し合っていると、グループのなかへ—あるいはグループを取り巻くようなかたちで—割り入ってくる。通常、私たちはこのような現象に気づかず、あくまでグループや社会の問題として理性的にすべてを取り扱おうとする。しかし、このイマジナルな世界への働きかけなければ、深いレベルでの、地に足のついた問題解決には至らない、とする観点がワールドワークの根底にある。

妙な言い方に聞こえるかもしれないが、私たちは日常的に、起きながらにして同時に夢をみているとさえ言える。ここで夢と現実の共時的関係について理解を深められるよう、プロセス指向心理学によるカップル・セラピーの例を挙げておこう。あるとき、ひじょうに弱々しい夫とパワフルな妻が心理相談のためミンデルの元を訪れた。相談の詳細は割愛するが、二人に話を聞いていくと、話題は夫が幼少時以来、繰り返す夢の話に及んだ。それはヘナヘナと頭を垂れている兎を猟師が銃で撃とうとしている夢であり、夫はこれを凄まじく現実感をともなう調子で語った。彼はその夢について話すうち、ふと「これは私と妻の関係と同じだ」と告げた。つまり自分が兎で妻が猟師のようであるという。また、

それと同時に、妻のほうでも似たような夢をみていたことが面接の過程で明らかになった。もちろん、それまで二人は互いのそんな夢など露ほども知らず、理性的に夫婦関係の問題を思い悩み、あらゆる方法で解決を試みながら、何ら成果を上げられずにミンデルの元を訪れたのである。しかし、この面接を契機に、妻の夢も大切にしながら夫の夢へ働きかけていったところ、結果として夫婦関係が深まり、二人はよりよい人間関係を築けるようになった。つまり、夫ならびに妻の夢は、夜寝ているあいだにみられていたのみならず、気づかないうちに昼間の夫婦関係にまで割り込んできた、と見ることができ、そこを取り扱ってこそ二人の夫婦関係に問題解決がもたらされたのだと言える。さらに付け加えておくと、そもそもの来談主訴は、夫のヘナヘナと力が入らないような（夢に登場した兎のごとき）原因不明の身体症状にあった。つまり、夢、身体症状、人間関係、いずれにも似たようなイメージないし現象が布置されていたのである。

このように私たちは、「夢のようでもあり、現実のようでもある。あるいは、夢でもなく、現実でもない（言うなれば、夢＝現実）」というような、いわば中間的な世界に我知らず生かされているのであり、このようなレベルを指してアンリ・コルバンは「イメージナルな空間」と名づけ、プロセス指向心理学では「場」と呼んでいるのである。

4) ロール

さて、あるグループワークのなかでAさんとBさんが衝突したとしよう。ここで従来の人間中心主義的な方法（たとえばエンカウンター・グループ）では、AさんとBさんという二人の人間の問題であるから、二人が心を開き、人間として対話し、あるいは対決することが望まれると考えてサポートするであろう。これが1960～1970年代に多大な影響力をもった心理学者、カール・ロジャースにより生み出されたエンカウンター・グループの姿勢である。

しかし今日に至り、プロセス指向心理学では、AさんとBさん、それぞれの背景に潜む、実在感をともなったイメージを見抜き、参加者全員でそのイメージを尊重しながらワークを進めている。この実在感をともなう個々のイメージのことを、ロール（role：役割）と呼ぶ。どのようなロールがそこに偏在しており、布置されているかを見抜くことが、ワールドワークにおいては重要になるのである。

2. ワールドワークの方法と展開

1) 場に漂う雰囲気を感じる

ここからは実際のワールドワークの進め方に沿って、具体的な方法・手順を解説していきます。ワールドワークの開催形態は、数時間から数日単位、さらにトレーニングを目的として数週間にわたるものまで実に多様であり、参加人数も、3人から数千人単位まで対応が可能である。

まず最初は、「この場にどのような問題があるか」「どんなテーマを取り扱いたいのか」を参加者に質問していくことになる。このとき、明確な言葉で「今日はジェンダーの問題をやりたい」「このグループでは白人と黒人の対立について取り組みたい」といった意見が語られる場合もあるが、必ずしもそれほど明瞭な表意を得られるとはかぎらないし、またそれだけに留意するのでもない。はっきりした言葉では語り得ない「何か」が場に漂っているように感じられる場合もあるだろう。

たとえば、企業には「社訓」というものがあるが、それとは別に言語化できない雰囲気のようなもの、いわゆる「社風」を私たちは感じることもある。この両者が一致していれば何ら問題はないが、一般的にはこれらのあいだに微妙な、あるいは歴然としたズレが生じていることもあるだろう。ワールドワークではこうした「場」に漂う雰囲気や空気を大事にして取りかかる。すると「何となく胸がつまる感じがする」「ソワソワしている」などと語る人がいるかもしれない。あるいは誰かが咳き込んでいたり、呻き声が聞こえているかもしれない。

2) ソーティング

この場にどのような問題や雰囲気があるか、どういったことを取り扱いたいかを述べてもらった後は、第2段階としてソーティング (sorting: 分類、仕分け) に入る。これは、提示してもらった問題や雰囲気をふるいにかける作業のことである。そのワークショップの参加人数にもよるが、参加者から取り扱いたいと希望されるテーマは、3つ4つのときもあれば、40 や 50 に及ぶこともある。要望がてんでバラバラになり、どれだけ分類しても10個以下には小さくならない場合もあるだろう。しかし、この作業を丁寧におこなうことがきわめて重要である。

ワールドワークは、世界各国からさまざまな異文化の人々が集まるので、このソーティングの時点で各種の問題や衝突が生じてくることも多々ある。参考まで、これまでにワールドワークがおこなわれた都市を挙げると、テルアビブ、ワルシャワ、ボスニア、それにアパルトヘイト政策下にあった南アフリカ、ベイルート、またアメリカでいえばロサンゼルス、ゲットーやオークランドなど。最近では、参加者にテロリストやマフィアがいたり、弁護士、政治家、フェミニズムの専門家、あるいはKKKやブラック・モスLEM（黒人イスラム教徒）のメンバー、イスラム教原理主義者、キリスト教原理主義者、など、多彩な立場の人が見受けられる。招聘された団体についても、NGO、学校、心理学研究所に始まり、いわゆるテロリズムの地下組織や宗教団体まで多様である。

ちなみに「テロリスト」というのは、社会の中心にいる人たちからみた呼び名であって、当人たちに言わせれば「フリーダム・ファイター（自由の戦士）」であると称する。つまり、見方が変われば呼び名は変わる。いずれにしても、こうした参加者や場でおこなわれるワールドワークだけに、ソーティングの段階から慎重を期する理由が理解されるだろう。

3) コンセンサス

仮にソーティングの結果、5つほどのテーマに分類されたとしよう。今度は、どのテーマをワークに取り上げるかについて皆からコンセンサス（consensus：合意）を得る。ときに数時間を要するかもしれないが、ここでは避けがたく、いわゆるインフォームド・コンセント（informed consent：説明とそれに基づく同意）を皆から得られるよう、丁寧な手続きが求められる。筆者のこれまでの経験から述べると、このコンセンサスを十分に得ておかなかったばかりに、後のワークの途中で、抑圧を受けたグループからテロ的な行為や暴力を受けたり、あるいは場が行き詰まって完全にシラケてしまったことがある。

全員一致がみられれば理想的だが、異文化の人々が集まる場でそうしたことは稀である。大抵は多数決を採ったり、あるいはグループ内のある参加者がひじょうに深いレベルの気持ちを表出したことで皆が納得して一致をみることになる。しかし、それも起こらない場合は、ペンを回すなどのクジ引きを採用する。なぜかクジ引きで決めると多くの人が納得するという不思議な現象がみられるのである。

4) ホット・スポット

ここでは「フェミニズム」というテーマで、一同のコンセンサスが得られたとしよう。今度はこのテーマについて、参加者それぞれの思うところを聞いていくことになるが、そのとき、特に重要な急所・ツボを見いだすことが肝要である。これをホット・スポット (Hot spot) と呼ぶ。そのまま訳せば「熱い場所／熱い地点／熱くなった瞬間」ということになるが、一般的には政治・経済的あるいは軍事上の紛争地点を意味する語である。地質学において地下を探るときに、マグマが集中しており今にも噴出しそうな地点をこう呼ぶところから借用されている。

次々に参加者がフェミニズムについて語るなかで、ある女性が「私は夫から暴力をふるわれている」と言ったとたんに、皆のからだに急にカーッと熱くなったり、「そうよ！」と誰かが叫んで人々がざわめき始めたりするような、場が熱くなる瞬間が訪れるだろう。あるいは皆がゲラゲラ笑い出す瞬間。もしくは逆に、ホット・スポットとはいうものの、場がサーッと凍りつくような瞬間……こうした地点 (話のポイント) を探すのが第4段階である。

ワールドワークは、いわゆるグループワークであるのみならず、人間中心主義的な観点に加えて「場」中心の観点をも指向するワークであるため、「一種のフィールドワークである」という言い方ができるように思われる。ファシリテーター (進行者) は、「～について、どう思いますか？」と投げかけながら、参加者一人ひとりを「場」の大切な一側面であると捉え、「場」からの反応を待つ。誰かが話したときに、皆がゲラゲラ笑ったり、ブーイングが起こったり、満場一致で賛成するさまを観察しながら、「場」から肯定的なフィードバックが戻ってきていることを確認するわけだが、これがホット・スポットなのである。

5) ゴーストロール

ファシリテーターはホット・スポットに焦点を当てながら、ロール作りを進める。

再び具体例を引いてみよう。あるときアメリカで開催されたワールドワークの場で、ロシア人とポーランド人の対立がテーマに採られたことがあった。とかくアメリカでは、黒人の参加者たち (アフリカン・アメリカン) が、「黒人と白人の問題を取り扱いたい」と希望することが多いため、このテーマに取り組むことになる機会が多い。しかし、それによって他の人たち—中南米系アメリカ人、アメリカ先住民など—と白人の対立問題が後回し

にされるきらいがある。仕方のない側面ではあるが、これによって、取り上げる問題の優先度をめぐり、「問題同士の強弱関係」が生じることになってしまう（本稿では、この点を指摘するのみに止めておきたい）。

さて、このワークショップの際にも、ポーランド人たちが「私たちは、ずっとロシアに抑圧されてきたから、この問題をやりたい」と訴え続けていた。それが開催から2週目にしてようやく順番がめぐってきたのだが、いざロシア人とポーランド人たちが前に出てみたものの、互いに沈黙したまま数十分を経過してしまい、まるでワークが進まなくなってしまった。どうしたのかと思見守っていると、一人のポーランド人が「怖い」と呟いた。もちろんワールドワークの場では、暴力的なテーマや殺意、たとえば自分の息子が性的虐待を見知らぬ男から受けたという問題など、さまざまに恐れを誘う場面が出てくるわけだが、しかし、この時点ではすでにワークショップ開始から2週間が経過しており、参加者同士は互いに顔見知りとなっているため、前出のポーランド人が呟いた「怖い」は、そこにいる参加者が怖いという意味であろうはずはない。それにもかかわらず、彼は「怖い」と言ったのである。

すると、ポーランド人ばかりでなく、ロシア人も含めたその「場」の誰もが「怖い、怖い」とうなずき始めた。いったい何が起こったものかと見ていると、あるロシア人がぼつり、「KGB」と一言呟いた。それでも周囲で見守る筆者ら（「場」の外にいた参加者たち）には彼らの言わんとするところがわからなかった。KGBは周知のとおり旧ソビエト連邦の国家秘密警察であるが、すでにソビエトは崩壊しており、もはやKGBは存在していない。ところが話を聞いていくと、まだソビエトが存在していた時代には、ソビエトのみならず東欧諸国すべてにKGBの手が行きわたっており、共産主義に異を唱える者を告発するよう促していたというのである。それは家族や恋人の関係さえも疑心暗鬼にさせる相互監視・密告の根深い恐怖であった。つまり、ワークに参加者しているロシア人やポーランド人たちは、どこからともなく漂うKGBの気配を、その「場」に感じて脅えていたのであった。

このKGBは、あくまでイメージでしかない。しかし、先ほど述べたように、この「場」にいる人々にとってKGBのイメージは、イマージナルな存在なのである。ワールドワークの場それ自体は、現実世界のなかで設定されたものであるが、しかし先述のとおり、同時に参加者が共同でリアルな夢をみているような作業なのである。言い換えれば、私たちは「目覚めて現実世界に生きている」と思い込んでいるが、しかし同時に、我知らずのうちに、起きながらにして夢をみさせられているのであり、「では、どのような夢をみさせら

れているのか？」ということを実験的に探っていく試みがワールド・ワークなのである。くだんのワークを外から見ていた筆者らにはわからないが、しかし「場」にいた人たちにとって、KGBはイメージでありながら、濃密な実在感をともなう存在にほかならなかった。こうしたレベルのリアリティを重んじる立場のことを、プラトンの時代には（今日とまったく逆の意味になるが）「リアリズム」と呼んだ。それが実在論、実念論と呼ばれるものであり、プロセス指向心理学ではこの立場を現代的解釈のもとに尊重しているのだとも言えよう。

先のケースをふりかえり整理してみよう。ポーランド人のグループAと、ロシア人のグループBという、二者のロールを設けてワークを始めたところ、KGBという目には見えない第三のロールが潜んでいることが示唆された。このKGBのように、目に見えないながら「場」のなかで大きな影響力を担っている存在を、ゴーストロール（ghost role：幽霊のような役割）と呼ぶ。

そこでロシア人、ポーランド人のほかに、KGBの場所を設けてワークが進められる。すると、それまで「ロシア人とポーランド人の対立に関するワーク」であると思われていたものが、しだいに国境を越えた一般市民と、監視者であるKGBという二者の対決という構図へ変容していった。その対決によって初めて「場」が深まり、その後にロシア人とポーランド人の対決が促されることになったのである。

このときKGBというゴーストロールを皆が見抜けなければ、ロシア人たちとポーランド人たちは、ずっと無自覚なまま「KGBの影」をお互いに投げかけあいながら、中傷しあうだけの衝突に終始していたかもしれない。こうしたゴーストロールを、従来の人間中心主義的な心理学では、単に「投影（projection）にすぎない」という一語で処理してしまいがちである。これは自我あるいは主体のみの立場から見た観点である。ワールドワークにおいては、それをゴーストロールという一つの役割と捉え、目に見えるかたちで場作りをして顕在化させ、積極的に働きかけたほうが、はるかに有効であると考えている。

6) 加害者の役割をやり抜く

もちろんワールドワークは個人を尊重するが、しかし個人中心のワークではないため、一般市民のロールを誰がやっても、何人でやってもかまわない。つまり、ロシア人が一般市民のロールをとって、ポーランド人がKGBになってもかまわないし、またその後にはロ

シア人とポーランド人の対決というワークへ運んだ際でさえも、ロシア人がポーランド人のロールをやったり、その逆があってもかまわないのである。

ただ、ここでひとつ注釈しておく、とかく誰もが一般市民を演じたがる、という傾向があり、これはしばしばワークの深まりを低迷させる結果となる。なぜ誰もがマイノリティのロールをとりたがるかと言えば、弱い立場に同一化したほうが、皆の同意も得やすく「場」のなかでは安全だからである。

けれども、一方に浮上しているKGBのロールを皆で協力しながら積極的に掘り下げ、いわば「加害者の気持ち」を徹底して語っていくことがワークの上では重要なのである。しっかり互いに対決し、対立する二者が弁証法的に向かい合っていくことにより、凝り固まり、あるいは分裂した関係が、そこで初めて動き始める、ということがしばしば起こる。ここでみたKGBのようなロールは、ある種の加害者である。それゆえ、誰もがその役割（多くは差別者や弾圧者の立場）を担いたがらない。そのために、ワークの「場」においては、むしろ加害者側がマイノリティのさまを呈し始めることがある。しかし、加害者側のロールをしっかりとやり抜くことが、生産的な解決へ導くカギとなる場合が多いのである。では、仮にマイノリティの立場だけを尊重した場合にはどうなるだろうか。その人たちがワークショップを終え、地元に戻ったとしよう。一方的なマイノリティのロールにのみ同一化したまま、それを家庭や職場へ持ち込むと、もう一方の立場を抑圧しているために、押し込められた加害者のロールが外在化され、ときに破壊的な結果さえ、もたらしかねないのである。

ワールドワークの場で体験したことを実生活に活かそうと思うなら、むしろ加害者側の気持ちを相当程度自分のなかに受け入れ、根づかせることが必要である。それにより、しっかりと地に足のついたかたちでマイノリティの立場を生きることが可能になる。そのためにもプロセス指向心理学では、対立する両者の立場を等しくサポートするのである。

7) ランク

上位のランクにある者の特権

ところで、ワールドワークを展開していくと、往々にしてワークが行き詰まる（対決している二者の関係が深まらない、あるいは相互理解に支障をきたして流れが滞る）場面に

遭遇することがある。

過去において、このような失敗の原因をプロセス指向心理学のプラクティショナーたちが追及し、再検証した結果、「ワークをしている二者間には、ある種の上下関係ないし権力関係が働いているのではないか」という観点が見いだされた。これをランク (rank: 階級、格) と呼んでいる。このランクを見逃してしまうと、先に述べたホット・スポットやエッジと同じように、ワークが横滑りに流れて別な方向へ行ってしまうたり、停滞してしまうことになる。ランクもまたワーク全体を深めるため、そして相互理解を促進するためのツボであり、急所なのである。

なぜランクが問題になるのか、そのあたりを解説していこう。

まず上位のランクにいる者には、「利得」あるいは「特権」と呼べるようなものが生じる。その典型的な例は、下位のランクにいる者が日々思い悩み苦しんでいる問題や課題に対して、上位のランクにいる者は無知・無自覚なまま過ごすことができる、というものである。

たとえば、日本のような男性優位の社会では、夫婦関係や職場において女性が高い地位を得られず、心理的にもさまざまな悩みを抱えさせられることになるが、しかし男性の側には、そうした女性たちの苦しみや悩みを「全く無自覚なまま過ごせる」という特権が生じていると言える。あるとき職場で、夜遅くに男女が2人きりになったとしよう。女性は何とも言えない違和感を感じたり、場合によっては「何か危険なことが起こるのではないか」「レイプされるのではないか」という不安感や恐怖感を覚えることもあるだろう。または夜道を一人で歩いているとき、女性は男性に比べて、より強い不安を感じさせられることが多いだろう。しかし通常の場合、そうした女性の実感する世界が、男性の側にはまるでわからないのである。それは男性（すなわちランクの高い者）が、「意識せずとも済む、許されている」という利得を得ているということである。

さらにランクに無自覚であるがゆえに、男性は女性からそうした不安感を打ち明けられたり、あるいは脅えたそぶりに気づいた際、それはその女性個人に問題があるのだと考えてしまい、「君はおかしいんじゃないか？」といった（ある意味では不遜な）反応をすることになる。しかし、それは実のところ社会の構造的な上下関係に影響されているのである。そこを男性の側がしっかりと自覚し、理解して相手と接していかなければ、コミュニケーションが噛み合おうはずもない。

社会的ランク（身体的ランクを含む）

プロセス指向心理学では、このランクを幾つかにわけて考えている。

ひとつは前述した性差の例のような、歴史的・文化的に形成された「社会的ランク」であり、地位・学歴・財産・家柄などに属する上下意識もこれに分類される。さらにここでは、社会的ランクに含める形で「身体的ランク」を想定しておきたい。これもまた主として歴史や文化に影響されて生じるランクだからである。

たとえば健康な人は、長く体調を崩している人、あるいは障害をもつ人の気持ちを理解できないため、そうした人たちが真面目に取り組みながらも仕事はかどらない様子を見ると、「なまけているんじゃないか」と思って怒りを覚えたりする。また、背が高い人は低い人が受ける威圧感や劣等感というものを知らず、痩せている人は太っている人が感じる差別感に無自覚である。

もちろんこれらランクの上下は、時と場所など諸要素が変われば逆転される相対的な価値観でしかなく、いわゆる人間としての存在価値・存在意義といったものとは何ら関係がない。しかし、関係性の構造下に潜み、人々の見方や感じ方すべてに多大な影響を、しかも無自覚のうちに及ぼしているという事実は重要視すべきである。少なくともワールドワークにおいては、ワークを深める上で大切なツボとなる。

心理的ランク

さて、次には「心理的ランク」が想定される。

先に社会的ランクが、通常は自覚されないまま人間関係に影響を及ぼしていることを述べた。しかし一方で社会的ランクは、自覚された現実の社会制度や明らかな慣習として機能している側面があることを見逃せない。この社会的ランクの高さだけを盲目的に肯定して価値化するなら、ともすれば「人は、氏素姓あるいは文化的・社会的環境により人生のすべてを決定されてしまう」という社会決定論に陥りかねないだろう。

ところが現実には、仮に社会的ランクが低い一虐げられた一人であっても、心理的ランクの高い人、すなわち自分を信頼する強い気持ちに支えられているなど、内的な安定感の高さに支えられた人々がいる。心理的ランクが高いと、むしろ低い地位に生まれ貧しい生

活に苛まれた経験を糧として、より強く逞しく充実した人生を歩んでいたりする。

ただし、ここでも高い自己信頼感に支えられ意気揚々と暮らしている人は、その人の前に立たされた自信のない人が意識させられる引け目や威圧感といったものに、無自覚でいられるという特権を行使していることに変わりはない。

霊的ランク

これがいちばん文明化社会に住む現代人には縁遠く感じられるランクかもしれない。人間としての自信に支えられ「私は大丈夫だ」と感じているようなレベルではなく、いつも何らかの「大いなるもの」「人間を超えた存在」に護られている、あるいは「自然や宇宙との一体感を体験して心が揺るがない」など、従来の心理学用語では表現不可能な、人間を超えた何かに支えられているという感覚に属するランクをさす。

一見すると霊的ランクの高い人は、素晴らしいマスターや教祖のように慕われ、あたかも下位のランクにある人々の気持ちがわかるように思われがちだが、往々にして「それはあなたの業が深いからだ」などと、霊的ランクが下位にある人の苦しみや悩みを、無下に切り捨てるような言葉を漏らすことから察せられるとおり、上位ランクの特権を無知なまま行使している。

ランク間の問題

すべてのランクに共通して言えることだが、低いランクにある者はいつも苦しみに苛まれ、虐げられているがゆえに、特権やランクの存在そのものを意識させられ続ける。しかし、ランクが高い者は、仮にそれがかつては低いランクにいた経験をもつ人であっても、いつしかランクやその特権の存在を忘れ去るのである。するとランクの高い者が（ランクやその特権に無自覚なまま）あたかも人道的に、あるいは優しげに相手を理解すべく、共感的な態度でコミュニケーションを図ろうとしても、片や低いランクにある者はますます違和感を感じ、言いようのない怒りが込み上げたり、どうしようもない無力感に苛まれたりする。理由もわからないまま「通じ合えない」「伝わっていない」という感覚が膨れ上がる。

ただし、ここで言及しているのは、単純に「ランクに気づいて、それを外しましょう」という安易な平等主義的態度の提唱ではない。先にロールの項でも述べたとおり、あくま

で「自覚化し、しっかりやり抜くこと」が大切なのであり、ランクに注意を向けることは、ゴーストロールを見抜くこととも実に関係が深い。

以上の点を理解し、関係性の内に暗躍するランクの存在を見抜きつつ「場」をサポートすることが、ワールドワークにおいてはきわめて重要である。まずはランクというものの存在を皆が自覚し、上位のランクにある者こそ、丁寧にみずからの特権行使に気づき、相手にたいする発言を吟味しつつ対話することがなければ、下位のランクにある者がいくら自分の言い分を真剣に突きつけたところで、いつまでたっても対決は深まらず、ただ空回りが続くばかりでなのがある。

また、ここは議論の余地があるかもしれないが、筆者の経験に基づいて述べるなら、総じてランクは個々に独立している。つまり社会的ランクの高い者が、他の側面（身体的、心理的、靈的側面）に通じているとはかぎらないことを付け加えておきたい。

ワールドワークの実際

藤見：本当ならここで皆さんお一人おひとりに自己紹介を頂きたいのですが、しかし、これだけ多くの人数がいると大変な時間がかかってしまいます。そこで今日は、少し違った自己紹介の形をとりたいと思います。皆さんが、どういう方なのか、幾つかグループに分けてみたいと思います。

さて……「今日は、前回の続きだから『男から女への暴力』をテーマにしたい」と思っている方は、こちらに集まってもらいたいのです。そうではなくて『男と女の癒し』に関心がある」という方は、そちらのほうへ集まってみてください。テーマに関わらず、心理学のことやプロセスワークについて『勉強』しにきた」という方は、あちらへグループを作ってください。さらに、自己成長や自分自身の癒しなど、『自分』のことに興味がある」という方は、この辺りにきてください。それから……『グループワーク』に関心がある」という方はそちらのほうへ。そして最後、真ん中には……「よくわからないんだけど、まあ、きてみまじた」という方々（笑）。〈それぞれテーマ別グループへ移動〉

藤見：……ああ、『自分』のことに関心のある人が、いちばん多いようですね。その次が前回の続きとして『男から女への暴力』に取り組みたい人……『勉強』『男と女の癒し』は、ほとんどいない。『グループワーク』に興味のある人が若干名……『よくわからない人』は、今回少ないんだね。いつもはそこがいちばん多いんですよ（笑）。なるほど……みんな『自分』に関心があるんだ。

それでは皆さん、もし自分に2つ目の選択肢があるとしたら、どのグループへ行きますか？ もういちど移動してみてください。もちろん「これしかない」と思う方は動かなくても結構ですよ。

〈再度それぞれのテーマ別グループへ移動〉

藤見：ああ……人数の割合としては先ほどと全く同じですね。

実は2つ目の選択肢のほうが、より無意識に近いと言われているんですよ。自分にとって、より根が深いテーマであるかもしれない……うん。よくわかりました。いずれにしても今日のグループは、『自分』と『男から女への暴力』の2つが、ひじょうに磁力が強いんですね。私は、そこを意識してワークに臨みたいと思います。どうもありがとうございました。

では、早速始めましょう。まず初めは、皆さんから、「今日、どんなことをテーマに取り上げたいか」「何に取り組みたいのか」を、たくさん挙げて頂きたいのです。その

なかから、皆さんとの合意を得た上で、ワークのテーマを選んでいきたいと思います
……全員一致で合意できるかもしれないし、もしかしたら多数決を採らなければなら
ないかもしれません。あるいはジャンケンをしたり、ペンを回してくじ引きで決める
ことになるかもしれない……いずれにしても、前回は『男から女への暴力』という明
確なテーマが、あらかじめ主催者側で設定されていましたが、今回は皆さんと一緒に
テーマを考えていきたいと思います。

さて、それでは……部屋のなかにある雰囲気でもいいし、あるいはからだで感じて
いることでもかまいません。男と女に関係あることでも、また関係ないことでも結構
です。皆さん、いかがですか？ はい、どうぞ。

- 1 : 親子関係……親と子、またその子ども、さらにその子ども……連鎖的な親子関係に
ついて。
 - 2 : 女だからとか、男だからとか……あるいは女らしさとか、男らしさとか……本当に
あるのかなって。
 - 3 : 別れ？
 - 4 : ……自分が男の人に求めていたもの。
 - 5 : 男と女の違い。
 - 6 : 甘えと暴力。
 - 7 : 性。
 - 8 : 自己主張の仕方。
 - 9 : ……ことばとは違うもの。
- 藤見：それはどういうことですか？
- 9 : ことばじゃないもの。
 - 10 : 心とからだ。
 - 11 : 感じる……ということ。

藤見：……それでは皆さん、ちょっと目を閉じて頂けますか。そして「今、この部屋のな
かに、どんな雰囲気があるか」、あるいは「自分のからだで、今どんなことを感じてい
るのか」……少し、調べてみてください。もしかしたら、今日やりたいテーマという
ものが、皆さんのからだを通じて沸き上がってきているかもしれません。ただ、それ
に気づいていないだけかもしれない……ですから、自分のからだに気持ちを向けて、
よ〜く調べてみてください。

〈しばしの間〉

藤見：……はい、ではゆっくり目を開けてください。どうでしょう？ 何かホワイトボー
ドに書かれている以外に、感じたことはありますか？

12 : 恐れと拒否。

13 : ……再生。

14 : 「本当に理解しあう」というのは、どういうことか。

15 : 男と女が話をするとき。

16 : 依存。

17 : 優しさと強さ。

18 : 奄美のクロウサギ。

藤見 : 奄美のクロウサギ……どういうことか、ちょっと説明していただけますか？

18 : 写真集で見たんですが……大き昔から生きているクロウサギで、今のウサギとは違う……絶滅しかかかっていて、ひじょうに数が少ない……そのクロウサギが、生き続けられるかどうか……そのクロウサギのことを今、思い浮かべたので。

19 : 信じていたものに裏切られた、悔しさと悲しさ。

20 : ……混乱の底にあるもの。

〈突然、携帯電話のコール音が鳴る〉

藤見 : そうそう。今のうちに、携帯電話をもっている方は切っておいて頂けますか……あつ……それから、ワークが始まって前へ出ているとき、ケガをするいちばん多いパターンは腕時計なんです。倒れたときに自分の腕を時計で傷つけたりしますから、貴金属や装飾品なども外しておいてください。それからアラーム音が鳴る時計も、いちおう消しておいてください。それでは続きをどうぞ。

21 : 癒し。

22 : 緊張と安心。

23 : 兄弟とか、姉妹。

24 : 男と女が対等につながるとき。

25 : 力を合わせる。

26 : 協力すること。

27 : 生きる。

藤見 : では、あと2つくらい。

28 : 怒りの感情。

29 : コミュニケーション。

30 : 愛する……かな？

藤見 : まだ山ほどあると思うけれど、最後にあと1個だけ。

31 : 不安。

藤見：……さあ、似たようなテーマが幾つもありますね。違うことばで表現されているけれども……『親と子』と似ているのはどのテーマでしょうね？

32：『愛する』かな？

藤見：うん、関係ありますね。でも『愛する』というのは、もっと大きなテーマに繋がります。いわば永遠のテーマですから、このグループのなかでも百万通りくらいに細分化するかもしれません。「ここに挙げられたテーマのなかで、『愛する』ということに関連していない項目は1つもない」と言ってよいでしょう。『生きる』というのも同様です。トランプで言えばジョーカーのような存在ですよ。これを言われたら他に何も言えなくなっちゃう。

あらためて『親と子』に類似するものについて、いかがでしょう？

たとえば、『恐れと拒否』『裏切られた悔しさ』『不安』『怒りの感情』『緊張と安心』……このあたりは似ているようですね。あるいは『男と女が対等につながるとき』『協力すること』も似ているようです。

……これを見ていて私が思ったのは、『男と女』のワークということで集まったにも関わらず、直接それと関係がないテーマが数多く挙がっている点です。もちろん広い意味では、どれも関係あるのだけれど、『男と女』へ焦点が絞られてはいない」と言えいいかな。『男と女』に直接ふれているのは、『女が男に求めていること』『男と女が対等につながるとき』『女らしさ、男らしさ』といったような、せいぜい4つか5つほど。

それを除けば、他に挙がっているのは、とても大きなテーマが多いようですね。たとえば『優しさと強さ』なども、男女関係にかぎらず、どんな関係についても言えそうです……今、皆さんの希望を伺っていて「なるほど、今日のグループはそうなのかな」という気がしました。先ほど幾つかのテーマ別グループに分かれてもらった際も、男女関係よりはむしろ『自分』に関心がある人が多かったですね。それがここにも現れているのかもしれませんが……「もしかすると『男と女』を入り口としながらも、『自分』に関心をもつ方が多くいらしているのかな」というのが、今の時点での私の印象です。

これらのなかから、どれに、どういうふうに決めましょうか？ むずかしいですね。どうしたらいいでしょう。皆さん、このなかで「これがやりたい！」というものはありますか？

〈誰もがホワイトボードに見入っている。静かな空気が流れている〉

藤見：……それでは、あえて今日のテーマである『男と女』に関して挙げられているものを括ってみましょうか。

33 : 『協力』『力を合わせる』『コミュニケーション』なんていうのも、男と女の場合には、『関係性』という形で一括りにしていいと思う。『男と女が話しをするとき』もそう。ずいぶん違う次元の話が交わるわけですから、むずかしい問題ですよ。

藤見 : この『甘えと暴力』なども、全部そういうふうに考えますか？

33 : そう。

藤見 : じゃあ、『本当に理解しあう』というのも？

33 : ええ。

34 : 『別れ』も。

藤見 : はい、なるほど。

33 : 『自己主張の仕方』だってそうだし、『ことばじゃないもの』も一緒。『ことばじゃないもの』というのは、コミュニケーション全般の問題ともつながるよね。そこには、からだとセンスの問題もあるし。

9 : あの、私は（『ことばじゃないもの』を）男女のこととは別な意味で言ったんですけど。

藤見 : どう違いますか？

9 : コミュニケーションの問題も含まれてはいますけれど、「コミュニケーションに、ことばを使う以前の根源的なこと」として考えました。

33 : それから『裏切られた悔しさ』と『混乱の底にあるもの』というのは、男女の関係を想定しているわけですよ？

藤見 : すると『恐れと拒否』……これもそうかな？

13 : ちょっと違う。

藤見 : ちょっと違いますか。

33 : 『癒し』は『甘えと暴力』につながるかな？

藤見 : それについて、『癒し』とおっしゃった方、どうですか？

〈参加者 21、無言でうなづく〉

- 34 : 『依存』も『甘えと暴力』に関係するよね。
33 : 『緊張と安心』も『甘えと暴力』とつながっている。
35 : 『心とからだ』のところに『性』もつながると思う。

藤見 : 皆さん、これらの題材について、もう少し自由にいろいろ聞かせてください。

- 36 : 『兄弟姉妹』と『親と子』。
37 : 『兄弟姉妹』『親と子』と『自立』。

藤見 : よし、それじゃあ……これを見ながら、「今日このテーマをやれば、自分は熱くなれるな、ホットになれるな」と思えるテーマがあるかどうか、ながめてみてくださいか。熱くなれるテーマというのは、むしろ拒否感を感じるものかもしれない……知性的な判断も大事だけれど、今はホワイトボードのことばを目で見ながら、それをからだの感覚に落として、感じてみてください……このテーマをやると、部屋から出たあとに、昼飯でも食いながら思わず議論したくなるような、あるいはどこかで引きずってしまいそうなこと。自分が前に出てワークしなくても、見ているだけでグッと引き込まれそうなテーマ……どれが、そういうテーマでしょうか？

- 38 : 『甘えと暴力』。
39 : 私は『女が男に求めるもの』ですね。自分のなかに、どうしても男の人にたいして、「認めてほしい」とか「かまってほしい」という依存心を感じるんですよ。相手もまた、私にたいして同じような気持ちをもって、お互いにもたれ合っているように感じられるので……「もう少し、いい関係になれないかなあ」と思いつつ、自分でもそこから抜け出せないでいるんです。

藤見 : 今、私には、彼女のことばから強く伝わってくるものがあったのですが、他の方はどうですか？

- 40 : 私は「どうして男の人と女の人を分けるの？」って。頭ではわかるんだけど。男女の話にかぎらず、『緊張』と『安心』とか、『ことば』と『ことばでないもの』とか……みんなつながっているのに。

藤見 : ……いかがですか？ 見えないところでマグマがうごめいていそうなテーマ。胸とか腹を突き上げてくるようなものはないですか？

- 41 : 『暴力』ということを考えてとき、そこには自分を守るための暴力もあるはずなのに、男女関係の暴力というと、すぐに「本当はこっちを向いてほしいのに向いてくれないからだ」とか、「裏切られて悔しいからだ」とか、そういうふうに見られがちな偏見があるような気がして……。
42 : 『裏切られた悔しさ』が、他者にたいする『怒り』という表れ方になるんじゃないか

と思う。

藤見：今、聞いていると、男と女に関する『甘え』とか『依存』というあたりを入り口に、もう少し深いところで『暴力』『怒り』『裏切られた悔しさ』というようなものが沸き上がってきているのかな、という気がします……いかがでしょう？

43 : コミュニケーションを妨げる原因としての『甘え』『依存』。

藤見：ええ、そうですね。じゃあ、どうでしょう……ひとつの入り口として『甘え』『自立』『依存』というあたりから始めてみましょうか。

「それは違う」と感じる人はいらっしゃいますか。「このテーマでやったらシラ～ッとしてしまう」とか「全然入れない」という人はいますか？

藤見：何となく熱いマグマのような流れを感じますか？

……うん。じゃあ、『甘え』『自立』『依存』というあたりから始めましょう。それでは、始める前にもう少し場を練っておきたいと思います。この時点で3人1組になり、『甘え』『自立』『依存』あるいは『暴力』といった辺りについて、1人3分間ずつ話し合しましょう。沈黙していたい方は、他のメンバーに「私はただ沈黙しています」と伝えてください。

これは「解決を見いだそう」というのではなくて、このテーマを深めていく最初の土ならしのような作業だと考えてください。過去のご自分の体験でもいいし、単なる想像や空想でもいい。聞いた話や映画でみた話でも、何でもかまいません……隣近所の人と3人1組になってください。

鳥山：じゃあ、ちょっと目を閉じてください……深～く息をついて、少し自分の内側に集中してください……話す順番を決めましょう。ジャンケンでも何でもいいです……それでは順番が決まったら、少し静かにしてみても……今、藤見さんから説明がありましたが、聴くときには、話しをする人のことばを全身全霊で聴きます。「自分の順番のときに何を言おうかな」と考えながらではなく。

相手がしっかり聴いている、という“気”が話しをする人の深いところにあるものを呼び起こしてきます。そらごとで聴いていると、その関係が相手に伝わりますので、全身を傾けて聴いてください。自分の番がきたときに、すぐ自分のなかからことばが出なければ、慌てて話しをする必要はありません。まったく出ない場合も、黙ってその時間を過ごします。そのとき周りの人は「この人が何も話さないから、私が話をしようかな」と考えるのではなくて、その沈黙もまた相手の時間ですから、尊重してください。

それから、聴いているときに評価や評論は一切しないで、ただ聴くことに徹してく

ださい。それでは始めましょう……時間を計ります……最初の方、どうぞ。

〈順次、2人目、3人目とめぐる〉

鳥山：はい、そこまで。

藤見：それでは皆さん、お互いに挨拶してください……この『甘え』『暴力』『自立』『依存』『緊張』『安心』『裏切られた悔しさ』『怒り』『暴力』について、いかがだったでしょうか。もし「みんなの前で話してもいいな」「話したいな」という方がいらしたら、分かち合っ頂きたいのですが。

44：私、『別れ』をやりたいなと思って参加したんです……私、今パートナーがいるんですけど、「パートナーときちんと別れたいな」って……形の上で、ということではなくて……自分のなかにある依存心……きれいなことばだな……「相手に頼っている。相手に甘えているところが、自分にあるんだろうな」と、グループで話していて思いました。

だけど、そういう『依存心』を「いけないこと」だとはあまり思っていないんです。「いけない」とか「いい」ではなくて、「そういうものがあるんだな」というふうに。ただ「きちん別れる」ために、そこを「きちん見たいな」と思って。相手にたいして、私は後ろめたさがある……自分から「別れる」と言い出せない私がある……「きちん別れる」というよりは、「きちん愛したいな」ということに繋がっていて……すごくことばがきれいなんですけど……「きちん愛されたいな」ということを強く思いました。

藤見：はい、ありがとうございます。他の方、いかがですか？

19：今、『別れ』というお話がありました……私も今まで、パートナーにたいして……何度も「別れたい」と思う気持ちがありました……けれど、あるときには依存心もあって「別れたくない」とも思いました……それと、子どもの心……子どもは「別ないでほしい」ということを言います。夫には……「甘え」といいますか……「お母さん」というふうに私のことを考えている、という姿勢があったわけです。私も夫にたいしてリードをしていくような、どんな苦勞があっても頑張ってしまう肝っ玉かあさんのなところがありました……私の母もそうでした。

それであるとき、夫に裏切られて……孫と一緒に楽しい夕食をしたのが2日前なのに（涙ぐむ）……夫の浮気をみたとき、「別れたい……と思っています」と、号泣しました……でも夫は、「もうそういうことはしないから別れないでくれ」と言っています。

でも、私の母のことを考えると、やはり私の年齢くらいのときに父と別れました。私の母は今、85歳ですけど、「今、きちんけじめをつけなければ、私も母のような人生を送るんじゃないかな」と、昨夜も思いました。

それで今、自分の気持ちのなかでは、「別れたい」という思いが7分です。ただ、あと3分、「もういちど夫とうまくコミュニケーションが取れれば、やっていきたい」という気持ちがあって、揺れ動いています……私が、仕事の面とかそういうことで、夫のお母さん代わりをして、夫は“ふつうの女の人”を求めたのだと思いました。でも、あまりにもそれは……私にとって、みじめ……ですので、なかなか心の傷は消えないんです。それで今、自分はどうしたらいいか……「本当に男の人というのは、愛情がなくても、そういうことを求めるんだろうか」とか……そういうことに、すごく不信を感じてしまっている自分です。

- 45 : ええと……私も前につきあっていた人にすごく甘えていて、親に甘えられなかった分を、その人が甘えさせてくれたから、スキを見せられたら、もうそこに全部求めていたんですよ。

別れてから7年経つんですけど、それから先、全然好きな人とかできない……相手から好かれていると感じられないし、自分も好きだって思えないんですよ。それで、周りの友達が結婚して、子どもがいたりすると、なんか、そういうのにケチをつけたくなるんですよ。「どうせ結婚したってロクなことないじゃない」って。「あんなだったら、一人のほうがずっといいわよね」って。

〈あちこちから笑い声が起る〉

- 45 : 本当はパートナーが欲しいんだけど、本当のことがわからないっていうか、周りの雑音で「いい齢こいて一人でいて」なんて言われると、「そんなことはないよ、一緒にいたってロクな目にあってないじゃない」「あんなだったら、一人のほうがよっぽどマシよ」って言うんだけど、でも本当は寂しいという気持ちがある。

だけど今の段階で、もし好きになれる人が現れたとしても、またすごく甘えちゃって、そういう状態になるって知っているから、「だからそういう人が現れないのかな」とか思って。「そのうち、甘えたりしないようになったら、そういう人が現れるのかな」と思うんですけど……「いつになったら現れるのかな」とか、「一生ずっとこのままじゃ嫌だな」とか思っているんです。

……ただ、『男と女』っていうか、そういう関係になるのって、少なくとも10歳よりは上だと思うんですよ。幼稚園児とかでも「好きな子がいる」とか言うけど、『男と女』として好きになるのは、10歳過ぎてからだと思うんです。でも、私のなかで、まだ10歳になっていない気がするんですよ。だから「10歳になっていないからできないのかな」とか思って……う～ん……ただ、前はほんとに、周りの雑音に反発して、「ほんとに私は一人のほうがいいんだ」と思っていたんですよ。でも「そうじゃない」っていうのが最近わかって、本当はそんな嫌なんだけれども、でも「嫌だ」って認

めるのも癪だから、「どうせロクなことがない」ってごまかしているんだな、と思うんです。

藤見：今、話されているとき……グループのなかから自然にと笑い声とか、いろいろなものがいっぱい出ていましたね。グループ、つまり『場』のなかから、かなりいろいろな応答がきていました。ここから入ると、もしかしたらワークが深まるかもしれませんね。

……私は、この部屋をひとつの『からだ』として考えているんです。「この『からだ』のなかの、どの『ツボ』を押さえると、滞っている『気』、または『エネルギー』が流れ始めるかな」というふうに探していたんですね。今の方が、話されたら、皆さんがフッと笑い出したじゃないですか？　ということは、そこのツボを押さえると、おそらくこのグループなかでエネルギーが流れ始める、ひとつの急所かな、と思ったのです。

……ここで3人の方が話されました。1人目、2人目と進むに従って、だんだん問題が深まり、今ひとつの、ある種の急所みたいなツボに手がかかったのかな、という気がするんです。その証拠に何人もの方がフッと笑って反応したでしょ。そこから……たとえば、この部屋のまんなか『役割』を作って入っていくと、グッとテーマが深まっていく……これは私の経験なんですけど。

どうでしょう、皆さん。やってもいいのであれば、そこから入ってもいきたいと思います。どんなふうにそれが移り変わっていくか、私も全然わからないけど。あるいは、いきなり今ここで、ロールプレイを始める前に、「ちょっと待って、私はこういうことが言いたいんだ」とか、「違うテーマでやりたい」という人がいれば、お伺いしたいのですが、いかがですか？

46：「始める」というのは、「ワークを始める」ということですか？

藤見：あ、ごめんなさい……今の方の話に基づいて、ここでいろいろな役割を作り始めるということです……たとえば今の話では、『そんな男と女の関係なんか持ったってしょうがないわよ！』という自分がいる、と言ったよね。そういう自分をひとつの役割としてここに作る。そして別な場所に、夫婦関係をもっている友人たちという役割を作る……そういうふうに、今話を元にして、彼女の心のなかのことを、私たちみんなのテーマとして扱っていくわけです。

つまり彼女の内的な世界を借りて、みんなでワークをしていきます。今、彼女が話したことは、彼女自身の個人的なものであると同時に、「今この場で、みんなで話しているから、このグループみんなのことを反映している」と、私は考えているわけです。

さて……さらに彼女のなかには、「本当は寂しくて男と女の間関係を持ちたい」という

役割もあるわけですね。そこには、一方の男女関係を否定しているという立場から、この素直な……というか、「寂しいから関係をもちたい」という立場のほうへ移れない、そういう彼女がいるわけですよ。「では、そのまんなかで阻んでいる存在は何か？」という感じで、幾つかの役割を作りながら、それをみんなで話し合ったり、演劇をして、テーマをグッと深め、いろいろ考えてみる……そういう作業を始めようか、と私は思っているんです。

47 : あ、何ていうか……先ほどの方の話と一緒にしている部分もあるかもしれないし、ないかもしれないんですけど……『甘え』と言われると、僕に痛みがあるんです。僕は甘えたことがなかったし、甘えられなかったという思いが強くて……それと裏腹なことだけど、『甘え』ということばを聴くと、それが甘美な響きでもある。「僕にはそれが、なかったんだよな」という部分。そして同時に「もう終わったことなんだよな」という痛みが日々あるんです。

自分の子どもが大きくなってきて、僕は親として対応しようとするんだけど、甘えるという実感がなくて、どう対応していいか迷うというか……もっていないものを絞り出すようなきつきがあって……そういうことが今、言いたくて……。

藤見 : それはおそらく、彼女の話を出発点とするなら、『10歳になれていない私』という役割に関係あると思うんですよ。

47 : その『10歳』のところへ行こうかな。

藤見 : そうそう。ここらへんに参加してもらおうと思います……そういうふうに、皆さんのなかでいろんな気持ちが出てくると思うから、それをこの場に加味して、ワークしていくことができるんじゃないかな、と思う。

48 : あ、私が気になったところは……彼女が、一方的に甘えてしまうよくない関係を、「また繰り返すのではないか」と言うけれど、私にはそういう体験がまったくないので……それをどういうふうにすればいいか、わからない。

藤見 : うん……まずここに、「何よ男女関係なんて！」と言う自分がある。その存在が「寂しいなんて!」「どうせ同じことの繰り返しよ!」と言っている……おそらくね。そういう存在がいるからこそ、異性と関係を持たない現在の立場を、彼女は7年間続けてきた……違うかな?

45 : ええ、そうなんですよね……あと、周りから「みんな結婚してるのに、あんただけ結婚しないのは変だ」とか言われると、それに反発して「そんなこと言うけど、結婚してる奴なんてロクな目に合っていないじゃない!」という、周りの雑音に反応する部分がある。

藤見 : 両方あるわけだ。

45 : ええ……よく「子どもを産まなきゃ一人前じゃない」とか言うじゃないですか。産む前には、まず相手を見つけなきゃいけないんだけども。

〈グループから大きな笑い声〉

藤見 : なんて言ったの。もう1回言ってくれる？

45 : だから……産まなきゃ一人前じゃないんだけど、その前提として相手もいなきゃいけないじゃないですか (笑)。

〈グループから、さらに大きな笑いが起こる〉

45 : その相手がいないのに「いい歳こいてる」とか言われると、「世間並になってる奴らは、ロクな目に合っていないじゃないか」と反発してしまう……周りの雑音にたいする反発心から判断しているから、自分の本当の気持ちがわからない……そこで「相手ほしい」なんて言ったら、「そらみたことか！」と言われるのが目に見えているでしょ。だから、意地でも「ほしい」なんて言わない。

〈またもグループに大きな笑い〉

藤見 : うん、わかった……じゃあ、今から役割を作っていこう。

49 : 今、二つの立場の共通点に気がついたのは……「変えたいけど、変えられない」「そうしたいのに、こっちへ行ってしまう」ということ。

藤見 : それが急所だと思うよ。そこの役作りをみんなでやろう……では皆さん、次の点について連想、あるいは想像してください……「変えたいんだけど、変えられない」「変わりたいんだけど、変わらない」ようにしているのは、何でしょう……それは自分の心のなかのことでもいいし、自分の外の世界からの影響でもいい……変えたいのに、変えさせないようにしているもの。それは何だろうか、誰だろうか……それは人間かもしれない、あるいは幽霊や妖怪かもしれない……逆説的な言い方をすると、何であれば、みごとに自分の変化をしっかりと邪魔できますか？ 何であれば、「これのせいで僕は変われないんだよ」という、最高の言いわけにできるだろう？ 自由に想像してみてください。

藤見 : それでは目を開けてください。何か思いつきましたか？

49 : 私が自分で言い聞かせていたのは、私がそういう性格で、「そういう運命の下に生まれてきたんだ」ということ。私はそういうふうに人に甘えられないし、好かれられないという性格上の特質を持って生まれた。妹はそうじゃないけれど、私はそういうものをもって生まれてしまった、というふうに自分に言い聞かせていた。

藤見 : そのときに聞きたいんだけど、そうやって言い聞かせる自分はどんな自分ですか？ どういう自分が「あんたはそういう性格だし運命なんだから、人に好かれられないし変われないんだ」と言い聞かせてますか？

〈あちこちで、ため息を漏らす音〉

藤見：今、場から反応がありましたね。幾つため息が聞こえているから、大事なところなんでしょう。

49：……私のなかで、いちばん上において偉そうにしている自分。

藤見：どういう自分が偉そうにしているの。ちょっとからだで表現できる？

49：……からだはない、自分。

藤見：からだはない自分……じゃあ、どんな？

49：身体的じゃなくて、単に頭の命令するところ。

藤見：頭の命令するところ。偉そうなの？ いちばん高くて？

49：そう……それで、身体を持っていなくて、他のものを動かすけど、命令するだけで何もしない。命令して批判するだけ。

藤見：ああ、そうか……そうそう。この部分がすごく大事なんです。これがすごくヒントになると思うよ。後でワークのときに必ず大事になると思うから。そのワークをしていくわけです、今日。

50：私は今、考えてくださいって言われて、「変わりたいけど、変われない」っていうのがありますね……うまく変わればいい、成功すればいい、でももしかしたら失敗するかもしれないし、傷つくかもしれない……そういう自分が許せない。認められない。認めたくない。

藤見：失敗するかもしれないことが認められない？

50：失敗する私。そういう私は嫌だ。

藤見：では同じ質問をしますけど、どういう自分が「失敗するあんたなんか嫌だ」と言っているんでしょう？ つまり、みんな自分のなかにいろいろな自分があるんですよ。でも、いろいろな自分があるうちの、ある部分にしか皆さんは同一化していないわけです。

たとえば彼女のなかには、「失敗する自分が嫌だ」という自分もいる……今、聞いていてわかるでしょう？ でも、そこのところへ私たちはあまりしっかり気持ちを向けられないんですよ。その犠牲者になっちゃうわけ。だから「やれない」ってなっちゃう。

さて、どんな自分がこう言っているでしょう。「あんたね、失敗したり、ダメだったりしたら嫌だよ。嫌い！」……どんな自分が言っていますか、それを。まるで何のようでしょうか？ 人間でもいいし、人間でなくてもいい。

50：固くて強くて、跳ね返されるもの。『強者』『成功者』……色は黒くて、灰色って感じ。暖かくはない。冷たい。

藤見：……わかりました。

47：いいですか？ あのね、「今さら譲れない」「今さらここへきて変えることないよ」と言っている。

藤見：それはどんな自分ですか？

47：それはね、今まで本当に大変なとき、頑張ってきたその基本姿勢というのは大事な部分があったわけでしょ。「それをここへきて何なんだよ。もういいよ」と。

藤見：それを言っている自分はどんな姿をしていますか？ もう少し見せてください。

47：う～ん……そうだなあ。今までの、ほんとに大変だったときの自分。それを見ると……「今さら、いいよ。今さら、いらないよ」と。

藤見：もうちょっと姿を教えてください。「今さらいいよ。今さらいらないよ」と言っているのは、どんな人間ですか？

47：……過去が辛かったから……。

藤見：もちろん、もちろん。私が聞きたいのは、それは誰ですか、ということです。「今さらいいよ！」……これは男性ですか、女性ですか？

47：自分。

藤見：どういう自分？ ……こちら側にいるのは『すごく一所懸命で辛かった私』だよ（背を丸め、苦勞しているさまをやってみせる。そして場所を移動して）。では、こちらで「そんな辛いよ、もういいよ！」……この私はどういう私ですか？

47：………。

藤見：そこを見抜いていかないと、『私』はずっと犠牲者のままなんですよ。そこを見るのは誰だって辛い。みんな気づかない。でも、ここが急所なんです。このところをクリアにしていけないとワークが深まっていけない。だからお聞きしているんです。みんなに見えるように、みんながもっとふれられるよう、感じられるよう教えてもらいたいです

47：もう1回言ってください。

藤見：「ああ～、辛かった！ そんなの、もういいよ！」……私は誰でしょう？

47：ひじょうに矛盾しているんですよね。なんか……。

藤見：スーパーマンみたいな私？ それとも妖怪みたいな私？

47：弱い。

藤見：弱い私？

47：そう。

藤見：あ、強がっているけど弱いんだ。

47：そうそう、そういうこと！

藤見：どんなふうに弱い？

47：本当に強かったら、何かを求めない。関係ないから……。

藤見：本当は弱いんだけど、強そうにせざるをえない？

47：うん、たぶん。少なくとも、本当に強かったら関係ないもの。

藤見：どういうこと、「関係ない」って？

47：うん……何となく、そう考えたから。

藤見：じゃあ、私のことを見てください。どんなふうに弱いですか、本当は。

47：さっきの、痛みをもった大変な自分とおなじくらいに。

藤見：……ああ、なるほど……そうすると、先ほど彼女が言っていた『いちばん偉そうにしている自分』。それから、次の方がおっしゃった『強者』……これも似ていますね。ここで偉そうにしている『強者』の背後には、すご〜く弱い何者かがいるのかもしれない……それが今日のテーマかもしれないですね。

51：私は……「幸せになっちゃいけない」という気がする。

藤見：それはどういう自分ですか？

51：それを私も一所懸命に考えていたんだけど……はっきりしない。

藤見：では、私がお手伝いしますよ。どういう自分なのか、見ていてください……「幸せになっちゃいけないよ！」……この人は他に何と言いますか？

51：「うまくできているように見えてたって、それは絶対に嘘だ」って。

藤見：「幸せになっちゃダメだよ！ うまくできているように見えても、絶対に嘘だよ！」

51：「愛されるなんて、あんなたには無理だよ」とも。

藤見：「愛されるなんて、あんなたには無理だよ！ 絶対に嘘だよ！」……誰ですか、これは？

51：……ごめんなさい……ちょっと嘘が入っているような気が自分でも、父の姿に似ているような気がするんです……でも、それだけじゃないような気がする。

藤見：その『嘘』というところが、すごく大事です。『お父さん』と言ってしまえば簡単だけど、その『嘘』のところは、何だろう？

51：そうね、やっぱり……そうか……傷ついた私……が、一所懸命に大きくなっている。

藤見：先ほどの彼と似ているじゃない？

51：そうかもしれない。うん……そうね。

藤見：うん……ありがと……。今、話して頂いているようなところを、私のやっているプロセス指向心理学の言葉では『エッジ』と言います。日本語で言うなら『ツボ』とか『急所』ということですよ。皆さん、急に反応し始めていますよね。

……では役割を作りましょう。どなたでも自由に参加してくれてかまいません。この場所は、とても高みにいる上の方の存在、あるいは『強者』、はたまた偉そうな『お父さん』であったり、『お母さん』であったり。その声は「幸せになれっこないよ！」「今さらそんなことを！」とか、ことばの違いはあるかもしれないけれど、いずれにしても強い調子で訴える存在……その背後には、すご〜く弱い、小さい、すご〜く傷ついている存在がいる……今はこの2つ。後は、どんな役割が出てくるかわからないけれど、自然に生まれてくると思います。

まずはこの2つの役割を、皆さんのなかで、それぞれの役割に引きつけられる方々に演じて頂きたいと思います。それは演じる人自身のためでもあるけれど、今は、この役割のために心から遠慮なしにやってみてください。どなたかいらっしやいますか？ まずはことばを話さなくても、この場所に立つだけでもかまいません。

〈しばし間がある。ふと立ち上がり、1人の参加者が『強者』の場所へ立つ〉

藤見：『強者』らしくしてみてください……そうそう。

強：この設定は、先ほど話された方の状況なわけですか？

藤見：そこから自由にして頂いてけっこうです。彼女の話は、このワークの骨組みを成しているだけですから、そこからどのように肉付けされてくるかは全然わかりません。2つの役割がある以外には、何の設定もありません。

強：素であっても……自分らしくなってしまうてもいいのかな？

藤見：もちろん……やっているうちに、必ず自分に近くなります。

〈弱者役に2人が立ち、強者役にも1人加わっていく……弱者たちはうつむきかげんに座り、それを見下すように強者たちが立っている〉

弱：……強がってるだけじゃないかよ、早く本当の自分を見せろよ。泣いてみろよ。

強：……おまえなんて、愛されるはずがない。

弱：強がってるだけでしょ……本当の気持ちは自分の心のなかにあるじゃないか。泣いてるよ。泣いてる、泣いてる。

強：……情けないなあ、ほんとに。できないよ。絶対、おまえにはできない。

強：あんたなんか、愛される資格がないんだよ！ そんな権利があると思ってるの!?

弱：そんな思ってもいないことを言うなよ。そんなこと思っていないじゃないか。

強：おまえにはできないよ。

弱：失敗するって思っていないのに、そうやって強がるなよ。偉そうにするなよ。

強：できないんだよ、おまえには。

弱：顔が泣いてるよ。「できない」なんて本当は思っていないでしょ？ 強がるなよ。本当は弱いんだろう？

強 : 泣いていればいいの。何もできないんだから。
弱 : でも少しはできるよ。
強 : 本当にそう思うの？
強 : どうせやったら失敗するくせに。できない、できない。
強 : 幸せになれないんだよ。幸せになっちゃいけないの、あんたは。
強 : 幸せなんてことばはね、人をたぶらかすためにあるんだよ。幸せになろうなんてするから、みんな騙されて宗教に入るんだよ！
弱 : 幸せになりたいくせに。寂しいくせに。
強 : になれるはずがないの！
弱 : どうしてなれないの？
強 : だってあんたは、そういうふうに生まれてきたんだもの。
弱 : 弱いからダメなの。
強 : できないんだよ！
弱 : 育ててきたのはお母さんとお父さんでしょ。
強 : お母さんとお父さんなんて関係ない！
弱 : どうして？ 育てたのはお母さんとお父さんでしょ。
強 : あんたが、できないの！
弱 : だってそうやってきたのは、あなたたちじゃない。
強 : こんな惨めな子を生みたくなかったんだよ。こんな弱い奴……恥ずかしいよね、こなみつともない奴ができてさあ。何かすればすぐ失敗するし、メソメソするしさあ。
弱 : 弱いことが悪いなんて思ってないくせに。口だけじゃないか。強いのがいいことだなんて思ってないくせに。
〈しだいに『弱者－強者』のロールと『子－親』が二重写しになり始めている。対立構造が二分化し、時に入り交じりながらも2組が同時進行で言い合う様を呈している。ここでは便宜的に『子－親』が色濃くなった組と『弱者－強者』の色合いのまま衝突し続けている組に分け、それぞれ別に記述しておきたい。まずは『子－親』から〉
親 : おまえにはできないの。
子 : 何で「できない」って決めつけるの？
親 : 心配でハラハラして見ていられないんだよ。どうせ失敗するんだから。
子 : やらなくていいよ。できないし、やったってダメだから。
親 : どうせ傷つくんだから。
子 : そこから先は自分の問題でしょ？

親 : わかるんだよ。できないんだから、やらなくていい。

子 : やったほうがいいって思っているんだよ。

親 : やって失敗して傷つくのはあんたなんだから。

子 : 「傷つきたくない」って言ってごらんよ。「やらないほうがいい」じゃなくて、「傷つきたくない」って言ってごらん。強そうなふりしないで！

子 : やってみなきゃわからないから、やるって言っているんでしょ。できるかできないかは、やった結果なんだから。

親 : う～ん……でもね、できない。できないよ。あんた、できないの。

子 : それは自分ができないと思ってるからでしょ。それはあんたの問題だよ。あんたができないと思っているだけでしょ。俺とは関係ない。

親 : あのときも、あのときも、できなかったじゃない。今までに証明する例がいくらでもあるじゃない。

子 : そりゃあ、できなかったときもあるよ。

親 : できなかったことばかりじゃない！

〈「場」に笑いが起こる〉

親 : 過去の経験からデータを割り出して、ちゃんと科学的に判断してるんだよ！

〈「場」が笑いに包まれる〉

子 : だって……だってさ……誰でも小さいときは、できないところから始まるんでしょ？

親 : あんたは、できないことばかりじゃない。

子 : できなかったところから、だんだんできるようになるように自分で頑張ろうとしているのにさ、何で足を引っ張るんだよ！

親 : できないのにみっともないから、嫌なんだよ、私は！ 世間様にたいして恥ずかしいんだよ。あんたのためを思っているんだよ。落ち込んだりしたら可哀想で見えてられないから、先回りして言っているんじゃないのよ！！

子 : 先回りしてほしくなんかないんだよ。

親 : 子どもは先のこと見えないけど、大人は先のことが見えるのよ！

子 : 見えないからやるんじゃないかよ。

藤見 : 今、こっちのロール (『10歳の子どもの頃の私』ないし『弱者』) のほうが少し弱くなってきているね。それだけ、皆さんにお知らせして……じゃ、続けてください。

親 : あんたは幸せになっちゃいけないの。幸せになれないの。

親 : になれるなんて思っていること自体、だいたい考えが甘いんだよ。考えが間違ってるんだよ。幸せになっている人なんて、世のなかにいないじゃないか。

子 : そんなことを押しつけるの、よくないでしょ。

子：幸せをどう感じるかなんて、俺しただろ。

親：考えの持ちようだなんて、そんな洗脳されているんだよ。考えの持ちようがいいなら、戦争で殺されたって心持ちがよければいいと思えるわけ？ 「ああ幸せに死んだ」って。

子：戦争なんて言っていないでしょ。

親：「状況が悪くたって、人間は心の持ちようで幸せになれる」なんて言うからじゃない。

子：もっとゆっくりしゃべってみなよ。自分の気持ちに正直にしゃべってみなよ。

親：あんた『弱者』のくせに、何でそんな偉そうになってんのよ？

〈「場」に笑い〉

子：何で端からダメだなんて言うんだよ。

親：おまえはダメなんだよ。

親：私の子なんだからダメに決まっているんだよ。

子：じゃあ、あなたもダメなのね？

親：そりゃあそうだよ。トンビがタカを産むはずないじゃない。

子：だったら偉そうに言うのやめなさいよ！

親：親だもの。

子：親だからって子どもに偉そうに言うのやめなさいよ。

親：私だって親から偉そうに文句言われてきたんだから、100分の1くらい返したっていいじゃないか。

子：それはあんたの問題だろ。親から言われたとき、どう思ったんだよ。「嫌だな」と思ったでしょ？

親：いいや！ 「そんなものなんだな」と思ったよ。こんな私でも結婚して、あんたみたいなのが産まれたからね、「まだよかったな」と思ったよ。それでも「やっぱり失敗したかな」と思ったけどさ。

子：失敗したけど、それでも「いい」と思ったんだろ？

子：悲しかったんでしょ。何でそんな偉そうに言うの？

親：悲しくなんかないよ！ 「ああ、世の中そういうもんだな」と思ったよ。

子：「世の中そんなもんだ」って言い聞かせているだけじゃない。そんなこと思っていないよ。

親：事実そうじゃない。私より悪い状況で生きている人なんかいくらでもいるから、あれだけ後悔している人に比べたら私は幸せだよ。

子：あんた本当に「自分より下の人がいる」って思うことで自分が慰められる？

親：上を見たらきりがいいじゃない。高望みしてもしょうがないのよ。下を見て、

「あの人たちに比べたら」って思わなきゃ。

子：本当にそれで慰められる？ 満足できる？ あなた何て言ってほしいの？ どうしたいの？

子：人のことばかり言わないで自分が何かやってみたらいいじゃないの。

親：偉そうに言うんじゃないよ！ 「自分が何かやってみろ」だって？ そんなうるさいこと言うんじゃないよ。

子：俺が見つけようとするフタをするんじゃないか。自分ができない気持ちを押しつけてくるなよ。

〈これと同時に進行していた『弱者-強者』の対立は以下のとおり〉

強：うるっさいなあ!! おまえはダメなんだ! そこでジッと黙っている!

弱：どうして、そんなふうに怒っているの?

強：うるさい!! おまえは小さくなって、そこでうずくまって泣いている!

弱：何でそんなに怒っているのか教えて。

強：おまえはダメだからだ! 何もできないじゃないか! そこにうずくまっている! 泣いている!! おまえは何一つできない! 絶対にできない!!

弱：不安だけど、できなくない。

弱：やれるよ、やれる!

強：絶対にできない!!

弱：何でそんなに嬉しそうに怒るの?

強：(嘲笑するように) おまえは「不安で動けない」「自分を見たくない」ってごまかしているのがわかるからだよ。

弱：どうして怒っているのに嬉しそうなの?

強：おまえがうずくまって動けなくなっていれば、俺がここにいられるんだよ。だからおまえたちはそこにうずくまっているんだよ!

弱：私たち別にうずくまっていないじゃない。

強：でも、やりたいことは何一つできない。泣いているだけだ。何もできないんだよ、おまえたちは。動くな! そこにいろ!

弱：何に怒っているの? どうして怒っているの?

強：何もできないんだよ。何もできないんだ、本当に。おまえは何にもやりたいことはできないんだよ。自分ができないってことを見たくないから、そうやって人のことを言っているだけだろ。何もやりたいことができないだろ? 言いたいことが言えない

だろ？

弱 : 何でそんなこと言うの？

強 : そういう自分でいればいいんだよ、おまえは。

弱 : 何を怒っているの？ 私がずっと何もできなければいいの？

強 : 不思議に思っていな。ずーっとそうやってウロウロしてな！ 不安になって、探していな！

弱 : 何のために怒っているの？

強 : 一生やってろ!!! ずっとそのままでグルグルしてろ!!

弱 : あんた不安になったことないの？ グルグル回ったことないの？

強 : いいから、おまえたちは不安のなかでグルグル泳いでいればいいんだ！ そうすれば俺たちはここに安心していられる。

〈いずれの組も怒声まじりに声高になり、延々と喚き合いが続く。前に出て役割を演じている人々の後方から、「母さんだって苦しかったんだよ」と号泣し始めた人の声が響く—しばらくすると、ぼつり、「……不安だよ」という声。その一瞬、ピタリと喧噪が止まる〉

藤見 : ちょっと待って。それを続けてくれる？ 「不安だよ」って。

子 : 不安だよ……だから、あんたはそれを見ているだけでいいんだよ。何で、ますます不安にさせるの？ あんたの言うとおりだよ。そういうあんた自身が不安なんじゃないの？ 脅かしたいんでしょ？

強 : どんどん不安にさせてやりたい……もっと脅えろ！ もっと小さくなって泣け！

子 : 僕たちが脅えると安心するんでしょ。

強 : そう！ もっと怖がれ。もっと脅えろ。もっと小さくなってそこで泣け、うずくまって泣け！

弱 : 泣くと嬉しいの？

強 : もっと怖がれ、もっと不安になって動けなくなれ……「ほら見ろ、おまえはダメだ！」って言えるから。

藤見 : 言ってごらん。「おまえはダメだ！」って。

強 : おまえはダメだ！ おまえはダメだよ！ ほら、何もできないんだよ、おまえは!!

子 : それってさ、自分に言っていることに気がつかないの？ 「自分はダメだ、自分はダメだ」って。自分ができないから、俺が何かをやろうとすると、できないまんまにしてさ、自分が安心したいんじゃないの。

親 : あんたは理屈を言う立場じゃないの。ただそこにいるだけ。理屈を言うのは私だけ。
あんたはそこで不安になってブツブツ言っていればいいの。

強 : おまえたちが不安になればいいんだ、おまえたちが！

強 : (相手が立ち上がろうといるのを制して) 立っちゃだめ！ 座ってなきゃダメ！
〈立とう一座らせようとして、揉み合いになる。再び喚き合い〉

弱 : あきらめたくないのよ！

強 : おまえが泣き役をやればいいの！ おまえたちが地獄を見ればいいの！ おまえが
悲しくてうずくまる役をやればいいの！

〈にわかに揉み合いが激しくなり、押し合いに〉

藤見 : ちょっと待って。いっぺんにやるとケガをするから、1組だけに集中したほうがいい。
い。

〈仕切り直して一対になり、押し合いを再開〉

強 : 出てくるな、出てくるな！ (泣き叫び始める) 黙れ！ 弱いおまえは泣いてれば
いいんだよ！ 何もするな！

子 : 俺は弱いかもしれないけど、おまえにはわからない！ 俺のことなんだ！ どうし
ておまえと一緒にするんだ！

子 : やめてえー、やめてえー！ いいかげんにしてっ、もうやめてえー、いいかげんに
して！ やめてよおー!!

〈この瞬間、親と子に注目が集まる。〉

藤見 : ちょっと待って、待って。後ろ、気をつけて。

子 : やめてえー！

親 : やってみろ！

〈両者、互いに腕をつかみながら拮抗状態となる。子、叫びながら喘いでいる〉

藤見 : うん。呼吸が速くなっているよ。息に注目してごらん……よ〜く、お互いの眼を見
てごらん……眼を見ながら呼吸に注目して……そうそう。

〈親の腕をつかんだまま、子のからだは脱力したように沈み込む〉

子 : (はらわたを絞り出すように) もうやめてっ言ってるのに！ そんなことしないで！
いやあー!! …………… (号泣)。

親 : (喘ぎながら) 言うておくけど……殴れないだけだからね……殴りたくないか
らじゃないからね……。

藤見 : どうして苦しいの？

親 : ……体力の限界。

藤見 : 苦しさを大事にしてごらん。

親 : ……もうちょっと休んだらやるからね。

藤見 : でも今は、その苦しさを大事にしてごらん。苦しさに。

親 : ……苦しくて疲れたから、殴れないだけでね……可哀想だから殴らないわけじゃないからね、言っておくけど。

子 : 「可哀想だなんて思っていない」だって? (豹変したように) 冗談じゃねえ……許せねえんだよ、おまえみたいな奴は!

親 : あんたに許してもらおうなんて思っちゃいないよ!

子 : 誰に許してもらいたいんだよ!?

親 : 誰にだって許してもらいたくなんかないよ。

子 : じゃあ、どうしたいんだよ?

親 : 初めから悪いのはそっちなのに、なんで許してもらわなきゃいけないんだよ。悪いことしてないのに、許してもらおう必要なんかないよ。

子 : 「悪いこと」なんて言ってねえよ。人のこと殴っておいてよ! 親ならいいのかよ!

親 : いいんだよ。

子 : 何でだよ!

親 : 親だからだよ!

子 : 全然、答えになってねえよ。

藤見 : そう、しっかり。

子 : 何でいいんだよ!

親 : ……親が決めたんだよ。

(睨み合い。沈黙)

子 : ……やってみろよお! (親に馬乗りになって) どうだ、殴られる気持ちはよ! 自分が親にやられたらことを子どもにやり返すなんて、いちばん卑怯じゃねえかよ。そうだろ? 違うかよ!? 弱い者に手を上げてどうするんだよ、バカ。そんなの誰でもできるじゃねえかよ。

親 : できることやって何が悪いんだよ!

子 : ガキにやられたから悔しいんだろ?

親 : こっちは親から 100 倍やられてたんだ。おまえに私の気持ちがわかるもんか!

子 : わかんねえよ。

親 : 偉そうに言いやがって……こっちだって……何やられたと思ってるんだよ!

藤見 : 何をやられたの?

親 : ……ことばでは言えないようなこと、やられてるんだよ。

子 : それをどうしてこっちに返してくるんだよ。こっちが何かやったかよ。

親 : 親が親にいじめられたことを返されるために子どもが生まれてくるんだよ！ お約束じゃないかよ！

子 : 約束なんかしてねえよ。

親 : 何で育てたって、殴るために育てたようなものなんだよ！

子 : こっちはそんなつもりじゃねえよ。

親 : こっちはそのつもりで生んだんだよ！

子 : 知らねえよ、そんなもん。こっちは子ども生んでないからね、言うておくけど。子どもにそんな思いはさせないからね。

親 : 私だって子どもなんか生んでないよ！

子 : おまえ男だもんな。腹を痛めて生んでないもんな。

親 : 男じゃないよ……私には子どもなんて、そんな罪作りのことしてないよ。

子 : 罪作り？

親 : 罪作りじゃないかよ。

藤見 : ……ちょっと待って。(親に) 今、子どもの役になっているね。こっち側(子どものロール)へ来てごらん……だれか親の役やる？ 今、2人とも子どもになってきたから、押さえつける親の役を誰かやれる？ ……親は2人のこと押さえつけてごらん。子どもは親に言いたいことを言うてごらん。

子 : 何でこっちに言うんだよ！

親 : うるさい！ 口答えするんじゃないよ！ 言うことを聞かなければ殴られて当然なんだよ！

子 : あんたはそうされたかもしれないけど、私は嫌なのよ！

親 : うるさい、口答えするんじゃない！ 親に刃向かうなんて、とんでもないことなんだよ！

子 : それはあんたが言われてきたんでしょ

親 : 当たり前だ、刃向かうんじゃない！ 黙ってる！

子 : あんたがそう言われてきて悔しいから、こっちに言うてんでしょ！

親 : 当然のことだ！ 子どもが親のいうことをきくなんてのは、当たり前のことなんだよ！

子 : 誰から習ったの？

親 : 親から代々そういうことに決まってるだろ!! 何でそんな常識がわかんねえんだ、バカ!!

子 : あんたの子だからだよ。あんたの子だからバカなんだよ。

親 : ……叩き直してやる！ 引っぱたいてでも!! その根性直してやる！

子 : そんなことで殴らないでよ。そんなことされたら余計に根性曲がって…。

親 : うるさい、口答えするんじゃない! 親の言うことをきかない奴は、痛い思いをして当然なんだ!!

子 : バカ。

親 : 何を、もう1回言ってみろ。

子 : パーカ、バーカ。

親 : 殴られたいのか、てめえ!

〈親と子、スッと立ち上がって揉み合う〉

藤見 : ケガする恐れがあるから、お互い気をつけてね。しっかり丁寧に、心を込めてやっ
てごらん……誰か後ろ、守っててね。

〈両者、立ったまま睨み合う〉

親 : 何だよ、その目つきは!

〈建物のどこかから、ゴンッゴンッゴンッゴンッと、重く鈍い音が聴こえてくる〉

藤見 : ちょっと待って。この音に従ってやっごらん。

親 : そのナメた態度は何だ!

子 : 何でもねえよ。

〈揉み合いになり、ひたすら続く〉

親 : 何だ、その根性は! 叩き直してやる。

子 : 叩き直して、やる、だとお?

親 : この生意気な、許さん!!

子 : 自分を殴れよ。自分を殴ればいいじゃねえか!

親 : 何だ、そのナメた態度は!?

子 : 自分のことは殴れねえんだろ? 自分が痛い思いするのは嫌なんだろ?

親 : バカヤロー、おまえが痛い思いをして、思い知れ。

〈親は激しく押し、子は押し返す一力が拮抗して止まる〉

藤見 : そこで止まって……目を閉じてごらん……そのまま。自分の顔の表情に従ってごら
ん……ここでグッとお互いに『力』を感じてごらん……このまま止まって、自分たち
の『力』にグッと瞑想してごらん。

〈拮抗したまま動かさず……睨み合い、呼吸は荒くなる〉

藤見 : いいよ……目を開いて、お互いを見てごらん……そう、呼吸に従ってごらん……自
分の直感に従って動いていってごらん。(子、首が左右に振れる) そう、首を振ってご
らん……うん、そうそう……首を振っていいよ……(子、泣き始める) いいよ、泣
きたかったら泣いて……。

おわりに～ドリーム・アップ

本稿を閉じるに当たり「ドリーム・アップ (Dream-up)」という概念についてふれておこう。

あるワークショップの参加者が、ファシリテーターである筆者に対して、突然、「あなたは、ひじょうにヒステリックだ!」と批判したとしよう。もちろん筆者自身は、ヒステリックになっているつもりがない。ところが彼と話すうち、いつしか文字通りヒステリックな気分になって行く……。

なぜ、このようなことが起こるのだろうか?

これをプロセス指向心理学では、ドリーム・アップという観点から説明する。

彼と話し合うなかで、私は、自分が「ヒステリック」な気分へ変化しつつあることに気づくだろう。そこで相手の男性に「昨晚、どんな夢を見ましたか?」と尋ねることにする。彼は「ひじょうにヒステリックな女性から攻撃されている少年の夢を見たんだ」と答える……そして同時に、その男性の声のトーンへ注意を向けてみると、かなりヒステリックな調子で彼自身が話していることに、私は気づく。

つまりその男性は、ヒステリックな女性が登場した“夢”を、「今、ここ」において抱えている—あるいは目覚めながらにして、夢のなかに浸かっている—のだと言えよう。それゆえ、彼の“対人関係”においても、相対する人（この場合は筆者）が知らぬ間に「夢のなかの役割 (ヒステリックな女性)」を無自覚のうちに演じさせられてしまう、ということが起こるのである。

男性の“夢”に現れた「ヒステリックな女性」は、彼の“声”に、そして“関係性”においても同時的に現れていた。つまり夢が現実のなかへ侵入して来るのである。当然ながら彼自身は、そのような事態に無自覚であるし、そしてまた筆者も、そこで無自覚なまま関わっていたならば、夢の女性の役割をより深く担わされて行っただろう。すなわち彼の夢の一部を演じさせられるか、あるいは彼の夢のなかの一部の存在に反応させられることになったであろう。このような現象をプロセス指向心理学ではドリーム・アップと呼ぶ。もうひとつ別な例を挙げよう。

あるときミンデルが、女性のクライアントとのセッション中、困難な問題にぶつかったことから、彼女に対して「一緒に話し合いましょう」と提案した。ところが彼女は「そうですね。いいですよ」と言葉では応えながら、なぜか首を横に振っている。あたかも「嫌です」というサインであるかのように。ミンデルが「あなたは首を横に振っていますよ」と伝えても、女性は断固としてそのような仕草をしているとは認めない。しかし彼女は、誰が見ても首を横に振っていたのである……。

そこでミンデルは、「最近、何か夢を見ませんでしたか？」と尋ねた。すると彼女から「ものすごくはっきり自己主張できる男性が、他者に対して『嫌だ!』と言っている夢をみました」という話が語られた。ところで、この女性は普段の生活において自分の言いたいことが言えない、つまり自己主張が苦手な人であった。そこからミンデルは、彼女の“夢”に登場した自己主張をする男性と、首を横に振る“動作”は、同じものの現れではないかと考えた。

いかがだろうか？ あるいは先述した「猟師とウサギ」の夢をみた夫婦の話を思い出して頂きたい。このように夢は、現実生活に入り込んでいる。言うなれば、現実と夢が二重写しになった世界に、私たち人間は生きている。けれどもそのような理解を持たない私たちは、無自覚なまま夢の役割を担わされ、それがために人間関係における種々のトラブルを抱え込むことになる……。

ここで少し別な角度から話を発展させよう。

心理学には、「パッシヴ・アグレッシヴ・キャラクター (Passive-aggressive character : 受動-攻撃性格)」という用語がある。これは、一見したところ引き気味な態度でふるまっているけれど、その実は、攻撃性を自己卑下という形で表すことにより、他者からの保護・関心を求めようとする性格、と説明されている。

このような人と一緒にいると、相手がひじょうに受動的な態度であるにも関わらず、往々にしてこちらは攻撃的な気分させられ、また事実そのようにふるまうはめになる。そのありさまを第三者から見れば、受動的な相手を私が攻撃しているように映り、こちらが全面的に悪いように見られてしまうだろう。

この受動-攻撃性格と呼ばれる人々は、自らの秘められた「間接的かつ操作的な攻撃性」

に気づいていない。自覚されていない。さらに彼ら彼女らにとって、受動的であること一
言わば、ある種の「犠牲者的な状況」に置かれること一は、当然ながら辛い体験であるけ
れど、しかし同時に馴染み深い立場でもあり、安心できるものである。おかしな言い方に
聞こえるかもしれないが、自分に攻撃的・暴力的な部分があることを自覚するよりは、「犠
牲者」でいたほうが安定していられるのである。こうした人々に特有のふるまひは、「攻撃
的・暴力的な部分に気づくこと」への防衛、と解釈することもできよう。いずれにせよ、
夢の一部分（一つの役割）にのみ同一化して生きている人の、顕著な具体例と言えら
う。プロセス指向心理学の立場からすれば、きちんと生きられていない夢の役割が、現実
の他者に担われる形で現れ（つまり「ドリーム・アップ」され）、直面ないし対決を余儀な
くされるのだと考える。

さて、これまで紹介したような「夢の一部だけを偏重的に生きている」という構造は、「被
害者ー加害者」という関係においても、往々にして見受けられる。すなわち、自分の内面
には加害者の部分が存在しているにも関わらず、被害者の役割にのみ同一化して生きてい
るというパターン。例を挙げるなら、「私は虐待された」と訴える人が、自分の子どもにた
いて暴力的・攻撃的になってしまう、にも関わらず、「これまで虐待されてきた。攻撃さ
れてきた」という思いが強いため、自分のアイデンティティとしては、相変わらず一面的
に「被害者」の立場にのみ同一化している、といったケースがそれである。

しかし、その人が自らの内にある加害者を自覚しないかぎり、「被害者ー加害者」という
“パターン”から自由にはなれず、そこから離れること一あるいは距離を置くこと一が難
しい。被害者であればこそ、内なる加害者・暴力者に目を向け、それに直面することが大
きな課題になるのではないかと思われる。そのとき初めて、被害者は自らの立場から距離
を置き、そして癒されるのではないか。私はこれまでの臨床経験から、そのように実感し
ており、ぜひ本稿において提案させて頂きたいと考えたしだいである。

つい最近、私はクロアチアに招かれて、女性問題に取り組んでいる運動家たちとお目
にかかった。そのとき何よりいちばん共感を呼び、「できればもっと話を聴きたい」「可能
であれば一緒にワークをしたい」と賛同の声を頂いたテーマが、実はこのドリーム・ア
ップの概念であったことを特に記しておきたい。

「加害者」とは、病に例えて言うならば「症状の創り手」である。善悪の価値判断をい
ったん保留するならば、これは「創り手」すなわちクリエイターとして見ることができる。

もちろん社会的・対外的には、ひじょうにマイナスな存在であるけれども、実を言えば、その深奥には活発な創造的エネルギーが秘められている。心の奥底にある創造的エネルギーを自分がしっかり受け止め、やがて自分のものにできたとき、内的な“力”が動き始めるだろう。

本論に翻って説明しよう。「被害者－加害者」というパターンに陥り、苦しんでいる人々（被害者側）には、その人自身の創造的エネルギーが「加害者」という形で（外在化して）働いてしまっている、というケースがひじょうに多く見受けられる。そのとき内なる加害者に目を向け、大事に丁寧につきあっていくと、それまでは外的な加害者という形で働いていた創造性が、より本人にとってよい形に変容して働いてくる場合がある。自らの創造性を味方につけるためにも、内なる加害者と向き合うことが大切なのではないだろうか。最後に今一度、「ドリーム・アップ」そして冒頭で述べた「全体性」の概念を思い返し、親しんで頂けたなら幸いである。

[引用参考文献]

1. Corbin, Henry. *Mundus Imaginalis or the Imaginary and the Imaginal*. Spring, 1972.
2. Gordbread, Joseph. *Radical Intercourse: How Dreams Unite us in Love, Conflict and Other Inevitable Relationships*. Portland, Oregon: Lao Tress, 1997
3. 藤見幸雄、痛みと身体の心理学、新潮社、1999年
4. Mindell, Amy. "The World Channel in Individual Work" *Journal of Process Oriented Psychology*, Vol. 5, No. 1, 1993
5. Mindell, Amy. "Discovering the World in the Individual: The World Channel in Psychotherapy" *Journal of Humanistic Psychology*, 1995
6. Mindell, Amy. *Metaskills: The Spiritual Art of Therapy*. Santa Monica, CA: New Falcon Press, 1995
7. Mindell, Amy. *Riding the Horse Backwards: Process Work in Theory and Practice with Amy Mindell*. NY: Penguin Books, 1992
8. Mindell, Arnold. *Working with the Dreaming Body*. NY and London: Penguin Arkana, 1984
9. Mindell, Arnold. *River's Way: The Process Science of the Dreambody*. NY and London: Viking Penguin Arkana, 1986
10. Mindell, Arnold. *The Dreambody in Relationships*. NY and London: Viking Penguin Arkana, 1987
11. Mindell, Arnold. *City Shadows: Psychological Interventions Psychiatry*. NY and London: Viking Penguin Arkana, 1988
12. Mindell, Arnold. *Inner Dreambodywork: Working on Yourself Alone*. NY and London: Viking Penguin Arkana, 1990
13. Mindell, Arnold. *The Year I: Global Process Work with Planetary Tensions*, NY and London: Viking Penguin Arkana, 1990
14. Mindell, Arnold. *The Leader as Martial Artist: An Introduction to Deep Democracy, Techniques and Strategies for Resolving Conflict and Creating Community*. San Francisco: Harper Collins, 1993
15. Mindell, Arnold. *The Shaman's Body*. San Francisco: Harper Collings, 1993
16. Mindell, Arnold. *Sitting in the Fire: Large Group Transformation Using Conflict and Diversity*, Portland, Oregon: Lao Tse Press, 1995

(財) 女性のためのアジア平和国民基金 (アジア女性基金)

アジア女性基金は、1995年7月、日本軍が関与して「慰安婦」とされた被害者の癒しがたい苦しみを受け止め、少しでもその苦しみが緩和されるよう力を尽くし行動することが、耐え難い犠牲を強いた日本の責任を表すとの認識から、市民と政府が一体となって発足いたしました。従って、基金の目的の一つは、「慰安婦」制度の被害者への国民的な償い事業です。それは、1) 被害者の方々の苦悩を受け止め、心からの償いを示す事業、2) 国としての率直なお詫びと反省の表明、3) 政府の資金による医療・福祉支援事業、4) 「慰安婦」問題を歴史の教訓とするための事業です。被害者の方々は、長い間沈黙を強いられ、高齢となられた今、償いに残された時間は限られています。そのため、アジア女性基金としては、一刻も早く日本の道義的責任を具体的に表したいという気持ちで、この事業に取り組んでいます。

同時に、女性に対する差別や暴力が「慰安婦」問題を生んだ背景にあるとの認識から、アジア女性基金のもう一つの目的は、今日の問題である女性への暴力あるいは人権侵害に対して、積極的に取り組み、二度と「慰安婦」問題を生まない社会を作る事業です。その活動には：

- 女性が今日直面している問題についての国際会議の開催
- 女性の人権問題に様々な角度から取り組んでいる女性の団体への支援活動
- 女性に対する暴力、あるいは、女性に対する人権侵害について
の原因と防止に関する調査・研究
- 暴力や人権侵害の被害女性に対するカウンセリングおよび
自立支援等があります。

基金の事業や活動についてのお問い合わせ、出版物のリスト等をご希望の方は、下記の住所にご連絡下さい。なお、インターネットでも基金の活動はご覧になれます。

住所: 107-0052 東京都港区赤坂 2-17-42

TEL: 03-3583-9322

FAX: 03-3583-9321

e-mail: dignity@awf.or.jp website: <http://www.awf.or.jp>